

ツイッターを活用した作文指導の試み

高橋知也（チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学）

wra400104080@hotmail.com

1. はじめに

日本語教育において作文を書くことの目的は、ただ単に文法や語彙を正しく使うだけでなく、学習者が自分の考えを日本語でまとめ、それを発信できるようになることであると思う。しかし、従来の作文授業では教師と学生の一対一のやり取りしかすることが難しく、物足りなさを感じていた。そこで、インターネット上のミニ・ブログサービスであるツイッター(twitter)を活用した作文の授業を実践したので、これを報告したい。

ツイッターは2006年7月に開始されたミニ・ブログサービスであり、手軽に情報が発信できるという特徴がある。ツイートと呼ばれる一回の発言は140文字以内に制限されるものの、外部サービスを利用すれば長文の投稿も可能である。また、情報を発信するだけでなく、フォローという作業を経ることにより、他人の投稿を自分のページに表示させることができる。

2. 実践の概要

実践の概要について、参考にした先行研究、授業計画、実際の実践、学生の反応の順に述べていきたい。

2-1 先行研究

この授業の実践は細川(2003)を参考にした。細川(2003)では「現在、学習者が興味・関心を持っている問題をテーマとし、その問題と自分との関係について『〇〇と私』というタイトルでレポートを執筆する」ことが「初級後半以上、どのレベルでも可能」な活動として紹介されている。

この活動では、まずレポートを書くに当たって「〇〇と私」というところにどんなタイトルを付けるか決定し、次いでなぜそのテーマを選んだのか明確にするため動機メモを書き、さらに動機の終わりに必ず「私にとって〇〇とは～である」という仮説を入れる。その後、自分の仮説をしっかり受け止めてくれる人とディスカッションをして自分の仮説について相手から意見をもらい、それに対してまた自分の意見を返す。

下書きの構成は、1. テーマの動機（なぜ）、2. 具体例：ディスカッションの内容（だから）、3. 結論（と私は考える）、となるが、下書きのそれぞれの部分をクラス討議にかける。そのため、レポートはメーリングリストでクラス全員に提示される。レポートの最終的な字数は、初級後半4,000～6,000字、中級8,000～10,000字、上級10,000～12,000字となる。全員のレポートは相互自己評価を経て冊子にまとめられる。

2-2 授業計画

対象となった授業はトルコ共和国チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学2年生の上級作文1(İLERİ YAZMA BECERİLERİ I)である。この授業は週に2時間(45分×2)の授業であり、期末試験の期間を除き、2010年9月20日から12月31日まで15週間にわたり実施された。この2年生の学年は予備教育課程

(0年生)で約550時間、1年生で約380時間、合計して900時間以上の日本語学習を経ていることから、欧州共通参照枠 B-2 レベルの書く能力「自分の関心がある分野の多様な話題について、明瞭で詳しいテキストを書くことができる。いろいろな情報や議論を、評価した上で書くことができる」ことを授業目標として提示し、8,000字から10,000字のレポートを完成させるよう求めることとした。履修生の人数は合計して30名であったが、その内、再履修生(4年生)1名とハンガリーからのエラスムス交換留学生1名が含まれていた。

実施にあたり、30名の一斉授業ではグループ・ディスカッションやフィードバックが難しいと考え、クラスを7~8名のグループ4つ(A・B・C・D)に分け、週によって一斉授業かグループ授業のどちらかを実施することとした。細川(2003)の進め方を参考として、学期初めに以下のような授業計画を提示した。第6週と第9週が休みとなっているのは祝祭日のためである。

| | | |
|------|--------|----------------|
| 第1週 | 一斉授業 | テーマ設定 |
| 第2週 | グループ授業 | 動機の設定 |
| 第3週 | グループ授業 | 動機の設定・仮説の設定(1) |
| 第4週 | グループ授業 | 動機の設定・仮説の設定(2) |
| 第5週 | グループ授業 | 動機の設定・仮説の設定(3) |
| 第6週 | (休み) | ディスカッション |
| 第7週 | グループ授業 | ディスカッションの報告(1) |
| 第8週 | グループ授業 | ディスカッションの報告(2) |
| 第9週 | (休み) | (休み) |
| 第10週 | グループ授業 | ディスカッションの報告(3) |
| 第11週 | — | 中間試験 |
| 第12週 | グループ授業 | 下書き(1) |
| 第13週 | グループ授業 | 下書き(2) |
| 第14週 | 一斉授業 | 相互自己評価(1) |
| 第15週 | 一斉授業 | 相互自己評価(2) |

成績は、中間試験20%、平常点20%、レポート60%で評価した。大学の規定上、授業への出席は義務的であり、30%以上の欠席は出席不足で不合格となる。中間試験20%は、課題と採点基準を事前に告知し、制限時間内に書かせたものを20点満点で教師が採点した。レポート60%(60点満点)は、細川(2003:21)に倣い「クラスでの議論を経て、規定の枚数に達したレポートを完成させ、このレポートを所定の〆切までに提出するとともに、相互自己評価に参加すること」という条件を満たせば80%の点(48点)を取ることができることとしたが、学期途中で調整を加えた。

レポートをクラス全体に提示するため細川(2003)ではメーリングリストが使われているところ、本実践ではツイッターを活用した。その理由は、ツイッターの場合、ログインすれば自動的にフォローした相手の投稿を目にすることになり、書き言葉による双方向的なコミュニケーションをメーリングリストより実現しやすいと考えたからである。教師の立場からは、学生が書いた作文にリアルタイムで目を通すことができる、作文に対するコメントを書いた本人に対してだけでなくクラス全体に対して残すことができる、という利点がある。また、学生にとっては、他の学生の作文を読んでコメントを付けることができるし、他の学生と教師とのやり取りにも目を通して学ぶことができるという利点が考えられた。

2-3 実際の実践

実際の授業実践は、以下のように推移した。

第1週 一斉授業

クラスを4つに分けるに当たり、まず授業前にその案を掲示した。授業では、ツイッターがどういうサービスなのか紹介し、アカウントを作成して、教師のアカウントと学生同士が互いのアカウントをフォローするよう指導した。すでにアカウントを持っている学生に対しては、極力授業用のアカウントを開設するよう勧め、Hootsuite 等の複数アカウントに対応したクライアントソフトを紹介した。授業で使用できるインターネットに接続したコンピューターがなかったため、アカウントの作成は宿題とせざるを得なかった。授業後、グループ分けを確定した。

第2週 グループ授業

「考えるシート」(工藤ら 2007:102, 103)を使い、レポートのテーマを決め、動機メモを作成するよう指導した。このシートは日本人の児童・生徒を対象としているが、論理力、発想力、構成力、創造力といったさまざまな力を多面的に向上させるよう工夫されている。

第3週 グループ授業

「マッピングシート」(工藤ら 2007:102, 103)を紹介し、テーマから連想を広げられるよう支援した。宿題として、書いた動機メモと仮説を140字以内で区切ってツイートすることを求めた。区切ることが求めたのは、そのほうがコメントを付けやすいためである。すでにツイートしたものを書き直す場合に限り、外部サービスである twitlonger 等で一つにまとめて公開しても良いこととした。

第4週 グループ授業

書いた仮説を一人3分ずつを目安に発表してもらった。宿題として、授業時間内での、また、ツイッター上でのコメントにより作文を練り直し、1000字程度を目処にまとめ、まとめたものを公開することを求めた。さらに、次週までにディスカッションの相手を決めてくることも宿題とした。

第5週 グループ授業

誰に対してどういうディスカッションをする予定か発表してもらい、次回までにディスカッションを行って、その内容を公開するよう求めた。

第6週 (休み)

授業は休講だったものの、ツイッター上での指導は継続した。

第7週 グループ授業

予定通りディスカッションを終えられた学生にその内容を発表してもらった。すでにディスカッションが1回できた学生に対しては、新たに出てきた問題点を整理し、必要に応じて2回目以降の計画を立てることを促したが、この時点ではまだ半分近くの学生がディスカッションを終えていなかった。

第8週 グループ授業

授業では進捗状況を確認し、最終的な締め切りを第13週に設定した。レポートの長さについては最低4,000字以上と下方修正し、グループごとにレポートを取りまとめる係としてリーダーを決定した。また、です・ます体で書いている学生に対してだ体・である体書き換えることを求めた。

第9週 (休み)

休暇中であつたものの、できる範囲でツイッター上でのコメントを続けた。

第10週 グループ授業

個々のレポートに対するフィードバックはツイッター上でのやり取りを中心とし、授業では中間試

験の予告と、石黒・筒井(2009:135-140)を教材として「立場のある文章の書き方」について確認した。

第11週 中間試験

事前に告知していた「作文の授業でツイッターを使うことについてどう思いますか。賛成ですか。反対ですか。どちらかの立場で意見を述べる小論文を書いてください」という問題について、60分の制限時間内で記述させた。採点の観点、長さ、文体、立場がはっきりしているかどうか、主張の根拠があるかどうか、文と文の関連性がわかるかどうかの5つで、提出にあたっては自己評価も求めた。試験の後、ツイッター上にて平常点20%、レポート60%の採点基準について告知し、同意を求めた。

第12週から第14週まで グループ授業

3週にわたり、相互自己評価のためグループごとに全員のレポートを読むこととし、第14週までに読み終えた。それで、当初は第14週に一斉授業を予定していたものの、グループ授業を実施してそれぞれのグループメンバーのレポートを読む時間に充てた。レポートはグループで読んだ後、コメントを参考にして書き換え、最終的に完成したものを公開するよう指導した。ちなみに、教師からのコメントはツイッター上か授業時間内かに限定し、それ以外の場での個別指導は一切行なわなかった。

第15週 一斉授業

この週の火曜日までにグループリーダーに集めたレポートとグループで決めたレポート集のタイトルを提出させた。教師は集まったレポートをまとめてレポート集を作成し、一斉授業の際に完成したレポート集を披露した。授業では、一人につき2〜3分で自分のレポートの内容を発表するよう求めた。提出されたレポート集のタイトルと題目一覧は表1の通りである。

期末試験

「期末レポート」と題して、(1)レポートについて、完成したレポートの字数と自己評価、グループ内でのレポートの相互評価、グループ外の作品でいちばん気に入ったものとその理由、(2)ツイッターについて、ツイート数の推移、コメントのツイートを誰に対して送ったか、誰からももらったか、などを所定の書式にまとめて提出させた。

成績評価

中間試験20%、平常点20%、レポート60%で評価した結果、1名が出席不足で不合格になったものの、29名が合格し、合格者の平均点は87.1点となった。平常点20%は、出席点12点、ツイートの頻度(定期性)4点、学生相互のコメントのツイート4点で評価した。レポート60%は、長さの点が48点(8,000字以上が48点。1,000字刻みで減点していき、4000字に満たないものは0点)、自己評価6点、相互評価6点で評価した。レポートの長さは最も長いものが10,271字で、全部で16本のレポートが当初の目標であった8,000字以上の長さを達成していた。

2-4 学生の反応

第11週に実施した中間試験「作文の授業でツイッターを使うことについてどう思いますか。賛成ですか。反対ですか。どちらかの立場で意見を述べる小論文を書いてください」に対する答案では、賛成7名、反対23名という厳しい結果が出た。

賛成の論拠としては、楽しい、日本語でのタイプが速くなる、学生同士でコメントしやすい、書いてからすぐにコメントがもらえる、紙が無駄にならない、等が挙げられていた。反対の論拠としては、自分のパソコンがない、インターネットに接続できない、ツイッターのエラーが多い(over capacityと表示され接続できないことがある)、コメントを耳で聞かないと理解しにくい、手で書いたほうが漢字の練習になる、友達の作文を読むのに時間がかかる、教室外での学習時間が増えることに抵抗があ

る、文法の間違いはツイッター上で訂正されてもよくわからない、等が挙げられていた。

大学内に学生が自由に利用できるインターネット環境がないという問題は解決できなかったが、この結果を受け、レポートを手で書き、スキャンしてシェアしてもよいと提案した。しかし、その後レポートを手で書く学生は現れなかった。また、作文に対する教師からのコメントについては、文法的な誤りについては極力控え、内容に対するコメントだけに集中するようにした。

次に、学期末の「期末レポート」から明らかになったツイートの頻度(周期性)とコメントのツイートについて見てみたい。頻度(周期性)については、合格した29名のうち、学期中に9名は1か月以上、16名は15日以上ツイートを一度もしない期間があった。一方、コメントのツイートについては、29名中19名が同じグループの全員と他のグループのメンバーに対してもコメントできており、そのうち3名は履修生のほぼ全員に対してコメントを送ることができていた。

これらの結果からすると、ツイッターを使いこなすことはなかなか難しく、当惑した学生が多かったものの、従来の教室では難しかった双方向的な活動はある程度実現できたと言えるのではないかと思う。しかし、メーリングリストや別のサービスと比べてどのような特徴があるかは、今回の実践だけから述べることはできない。

3. 今後の課題

本稿では2010-2011年度前期に実践したツイッターを活用した作文指導の試みについて報告した。学習者に自分の考えを日本語でまとめさせ、それを発信させる上で、ツイッターは必ずしも利便性の高いサービスであるとは言い難かったものの、最終的にレポート集をまとめ、形あるものを作り上げることができた。今後の授業実践でも新しいサービスを試行し、教師と学生の双方にとって意義ある活動を模索していきたい。

参考文献

- 石黒圭・筒井千絵(2009)『留学生のためのここが大切 文章表現のルール』スリーエーネットワーク
工藤順一+国語専科教室(2007)『これで書く力がぐんぐんのびる!!』合同出版株式会社
細川英雄(2003)「個の表現をめざして - レポート作成『〇〇と私』」「『総合』の考え方と方法」早稲田大学日本語教育センター 20-30

表1 レポートの題目一覧

| A. ツイーハチ | B. マイクロー | C. 今日の見方で | D. 金曜 D |
|-------------|------------|------------|---------|
| 「私とドイツ」 | 「私と映画」 | 「私とアルバイト」 | 「私と歴史」 |
| 「私とアパート」 | 「私と外国語」 | 「私と図書館」 | 「私とお金」 |
| 「私と日本語教育学科」 | 「私とメーキャップ」 | 「私と言語」 | 「私とインド」 |
| 「私と動物」 | 「私と猫」 | 「ガイドの仕事と私」 | 「私と色」 |
| 「私と写真」 | 「色と私」 | 「私と結婚」 | 「私と故郷」 |
| 「将来と私」 | 「私と日本」 | 「私と物語」 | 「私と日本年」 |
| 「私と将来の仕事」 | | 「私と淋しさ」 | 「私と親友」 |
| 「私とファッション」 | | 「私と学生生活」 | |